

明石の史跡（38）離宮明石珠



明石の産物といえば、近世においては、糯米（もちごめ）・粳（うるしね）・綿布・竹子・笠・藁席（むしろ）・穂蓼（ほたで）・焙炉具（ほうろく）・蛸壺・縮に加えて、鯛・蛸・鰯・鱈（ぼら）や瓜、楊梅実などが挙げられる（播磨名所巡覧図会／日本名所風俗会図13.65頁）。

しかし明治になると、地場産業的なものが発達してくる。その代表的なものの一つが、明石珠であった。

天保年間のある日、江戸の籠甲細工業の小島岩三郎は、讃岐の金毘羅詣でを思い立ち、明石まで来たところ、船待ちかどうかはわからないけれども、しばらく明石に逗留していた。その「滞在中鶏卵の蛋白質凝結して固形体となりしものを原料とし、これに工夫を凝らし」て、練玉の発明にいたる。発明者の岩三郎は明石に腰を落着け、製造をはじめ、「明石珠」なるものを完成する。製造法は若干の人に伝授したものの、本人は、万延年間に死去した。

「明石珠」は、簪の「玉」の部分にあたり、きわめて精巧なものであつたらしく、一名を「擬珊瑚」と呼ばれ、本物の珊瑚珠のなかに混ぜておいても、真偽の識別が困難を極めたというぐらいの、すぐれものであつた。

明治20年（1887）には、職工37人。製造数額は536,780箇を数え、その隆盛のほどがうかがえよう。国内の販路は、東京・京都・大阪・名古屋・神戸を対象に、低価格の商品が中心であつた。それにたいし、中国向けの輸出品は、需要者の好みに応じて製造されたといわれ、品質良好で、高値の価格で取引され、「その商況はすこぶる繁忙を極め」たと報ぜられている（明治21年12月26日「官報」／明治ニュース事典4.634頁）。